様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２５０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６７０５

研究課題名（和文）過疎地域における神社神道の変容に関する宗教社会学的調査研究

研究課題名（英文）A Religious Sociological Research on the Transformation of Shinto in Depopulated Areas.

研究代表者
冬月　律（fuyutsuki, ritsu）

麗澤大学・外国語学部・講師

研究者番号：７０７２６９５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、高知県の過疎地域の神社祭祀と、その担い手である氏子意識の変容を明らかにし、地域内の全ての神社（103社）の多様な様相を包括的な概念でパターン化を図る。具体的には、旧窪川町の集落と神社、氏子を対象に実地調査と調査票調査を実施した。
研究成果として、対象地域の神社は、神社の老朽化・氏子の高齢化・後継者不足による祭祀維持の問題等などを抱えていることを客観的なデータで示した。そして、過疎化の影響は神社祭祀を中心とする氏子の信仰生活にも及んでいることを明らかにした。また、過疎地神社のパターン化では、神職の役割と氏子意識を基準にして、神社の氏子、運営、将来の三つの類型に分けて提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
調査研究の事例が少ないまま、過疎問題と神社との関係が論じられてきたことを問題意識として取り組んだ本研究の成果は、典型的な過疎地域である高知県旧窪川町の事例を取り上げ、実態調査と調査票調査の手法を用いて宗教社会学的分析を行うことで、過疎地域における神社の機能の変化過程を、外部と内部の変化から把握できたことに意義があると考える。
また、人口流動や人口減少は日本だけの問題に留まらない。過疎化と神社神道に関する本研究の成果は、過疎化が国内外における地域社会への文化的影響の全体像を理解するうえで、比較研究のほかに社会政策にも寄与できる点があると考える。

研究成果の概要（英文）：The study had two purposes. The first is to clarify transformation of ways of Shinto rituals Ujiko’s (parishioner) sentiment in one of the depopulated area in Kochi Prefecture, Kubokawa Town. The second was to prove variety of shrines through patternization of several features in the town. I conducted both questionnaire and field surveys for 80 villages and 103 shrines in Kubokawa Town.
As a result of the survey, it revealed that the shrines in the depopulated area had problems such as deterioration of the shrine, the aging Ujiko, and the lack of ritual successors. Furthermore, it clarified that the influence of depopulation also affected Ujiko’s faith life and their interest in the shrines. Regarding patternization of shrines, I was able to present overview of their Ujiko, management and future, based on role of priesthood and Ujiko’s interest.

研究分野：宗教社会学

キーワード：過疎地神社　社会変動　人口減少社会　実態調査　氏子調査　神社神道　宗教社会学　神道学

１．研究開始当初の背景

宗教学・神道学における戦後の社会変動による過疎化と神道研究は、昭和 30 年代の急激な都市化に伴い、40 年代になって過疎化が指摘されるようになったことと軌を一にして、「社会変動と神道」を問う実証的または理論的調査研究は、國學院大學日本文化研究所の岸本英夫の「神道の都市化」（岸本英夫 1964）を端緒に展開されてきた。日本の近代化、工業化による急速な農山漁村の解体過程に伴って、村落共同体の神社の機能の変化過程を捉えようとしたもの（戸川安章 1968）と、伝統的な村落社会における変化を、社会構造と文化レベルでの変化から考察したもの（伊藤幹治 1974）などがある。これらの調査研究は、地域共同体を基盤として成立し、機能してきた神社について、昭和 30 年代後半の日本の高度経済成長に伴う都市化・過疎化が及ぼした影響を具体的な事例から明らかにしようとした。

このような学術的背景のなかで、近年、過疎化（含限界集落）と神社に関する調査研究については、神社本庁と各神社庁の過密と過疎地域の実態把握と対策構築を目指した実態調査（神社本庁 1969,1977、兵庫県神社庁 1998,2000 など）では、「後継者問題」「氏子減少に伴う経済問題」「神社の合祀問題」などが過疎化に伴う共通問題であることを明らかにしている。しかし、これらは聞き取りによる実態把握に過ぎず、全体的かつ具体的な検証や対策への提言がなされていない。また、研究者による調査研究には、過疎化や限界集落化に直面する神社の実態を概観したもの（石井研士 2015）もあるが、個別事例の調査を含めた実態調査は行われていない。研究代表者である冬月は、2007 年から現在まで、香川県小豆島、高知県高岡郡一帯、栃木県足尾町、北海道夕張郡一帯などにおける過疎地域の神社と、その担い手である宗教者（神職）と地域住民を含む氏子との関わりについて、継続的な現地調査を行なってきた。その結果、地域社会の構造と神社神道との関わりの変化を明らかにし、また、仏教寺院や新宗教における調査を通じて、過疎化の影響は各教団に共通する大きな課題であることも提示するなどの成果を挙げた。

以上のように、過疎化によって地域神社の維持継承が困難になり、様々な対策が講じられてきた歴史がありながらも、過疎地域の状況は依然として改善されず、顕著になりつつある。今後も過疎化が進行する中、過疎化と神社神道の関係を示唆する調査研究が求められていると考える。具体的には、特定地域レベルでの体系的な考察を通じて、過疎地域の神社を取り巻く神社祭祀や氏子意識の変容を明らかにする必要があると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、高知県高岡郡旧窪川町の神社において、(1)過疎化前と後ではどのような変化があったのかを具体的な地域事例から考察、(2)地域神社側の多様な様相を包括的な概念でモデル（パターン化）構築を図る、この 2 点である。

具体的に(1)については、旧窪川町（現四万十町）の集落と神社（氏神様）を対象に、調査票調査を行い、各々の特徴を把握する。80 の大字集落（自治区は 200 地区）からなる旧窪川町には 103 の神社（宗教法人）がある。それぞれの集落とそこに鎮座する神社の実態調査を試みることで、集落の過疎化の程度や神社の機能（祭祀状況など）を把握するうえで有意義なデータを得られる可能性は高い。しかしながら、限られた研究期間で窪川町内すべての神社を網羅することは不可能である。そのため、本研究では調査対象を、旧窪川町の総鎮守である高岡神社（旧県社）と氏子地域に限定する。それは、旧窪川町の氏子のほとんどが、地域の氏神と高岡神社と二重氏子の関係にあることに起因する。

次に、(2)については、上記(1)の調査票調査のほかに、とくに過疎化の程度が激しい地域に限定し、その神社の担い手（神職・氏子・総代）から、インタビュー調査（デプスインタビュー）

を実施する。過疎化・限界集落化する地域の暮らしと神社での信仰生活の変化を明らかにし、神社の維持継承に対する氏子の意識を明らかにする。

また、合わせて郷土史(誌)や町誌における神社や地域に関する記述も収集・整理し、調査票調査とインタビューデータを補足していく。以上の過疎化に関する神社の内部と外部から収集したデータとその分析を通して、旧窪川町と地域神社を基にした包括的なモデル構築を目指す。

３．研究の方法

上記に挙げた目的を達成するために、本研究では、方法として、フィールドワークと、それを補完するための文献研究を組み合わせる手法を採用する。

フィールドワークでは、地域の過疎状況と信仰生活の変化に関するデータを収集するために、①神社の担い手への調査票による調査とインタビュー調査、②地域や神社に関する基礎的資料および郷土史等の史資料整理を行う。

研究遂行に際しては、年度ごとの成果目標を以下の通りに設定し、進捗状況を確認しながら研究を進めた。

平成28年度（初年度）：パイロット的現地調査の実施、基本的データ・関連研究の収集整理
平成29年度（２年目）：現地調査と調査票調査の実施、調査結果及びインタビューデータの整理と分析、学会発表等
平成30年度（最終年度）：前年度調査の整理、必要に応じて追加調査の実施、データの総合的分析、学会発表等、報告書作成

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究による成果は次の二つである。まず、過疎地域の神社を取り巻く神社祭祀や氏子意識の変容を明らかにするために、旧窪川町の神職と氏子を対象にした調査結果である。旧窪川町を形成する集落は、過疎化によって地域の高齢化が進行し、なかには集落機能が衰退していく過程にある地域もある。そのような厳しい状況下、集落の神社は今でも維持継承に問題を抱えながらも、地域の信仰生活の中心として機能していることが明らかとなった。さらに、特定の集落の氏子を対象にしたインタビュー調査を通じて、地域には宗教法人格をもつ氏神（お宮）のほかにも山の神様や水神様といった非宗教法人の神社（含む小祠）が多数存在し、今でも氏子による信仰生活が続いており、さらには、神社の維持継承は集落の行事として営まれていることを明らかにした。

もう一つ、本研究では、旧窪川町に位置する法人・非法人の神社を対象に実施した調査資料やデータを用いて、「過疎地域の神社はどのように護持運営されているのか」「そこにはどのような特徴があるのか」などを指標として、「神社の氏子」「神社の運営」「神社の将来」の三つについてパターン化（類型化）を試み、現在いかにして過疎地神社が護持運営されているのか、また、どのような神社が将来維持可能であるのかを、従来の研究による類型を再検討し、それぞれ４つのタイプで示すことができた。パターン化の結果、まず「神社の氏子」では、旧窪川町の各集落の場合、103 の神社（宗教法人）は実質氏子（氏子地区内に居住し、従来の慣行による氏子費を完全に納める者で、神祭に積極的に参加し、神職と日常的な交流がある）と祭礼氏子（氏子地区内に居住し、祭礼のときだけ町村つき合いの祭礼費を納める者で、神祭には必要に応じて参加（家祈祷）し、神職との日常的交流は薄い）で構成されており、崇敬者（個人の特別な信仰等によって神社を信仰する者）と名目氏子（近年の来住者で、その土地に馴染み

の薄い、氏子費を納めない、他の宗教を持つ、祭りに参加しない、といった特徴をもつ。傍観氏子または無関心氏子ともいう）はほとんど存在しない。次に、「神社の運営」では、旧窪川町に鎮座し、かつ宗教法人格を有する 103 の神社はすべて「神職・氏子混合型」（A タイプ）によって維持されており、「神職・氏子・崇敬者混合型」（C タイプ）と「神職主導型」（D タイプ）は存在しない。ただし、本研究の調査では地域の神社信仰の全体像を正確に把握するため、氏神のほかに、集落単位で信仰されている神社も対象にしていた。調査の結果、旧窪川町には、集落単位で慣習的に信仰されている神社が 100 ヵ所以上あること、さらには、そのような神社（小祠などの非法人格の神社）の多くの運営形態が「氏子主導型」（B タイプ）であることも確認できた。最後に、「神社の将来」については、旧窪川町に鎮座する神社の多くが全体に占める実質氏子の割合は低いため、内発的な取り組みを続けない限り持続は難しいと考えられる、「一部条件あり維持可能神社」（パターンⅡ、将来氏子地区内に居住する実質・祭礼氏子数と、氏子費を納めている人は多いが、神社行事に積極的に参加し、神職と日常的に交流をもつ氏子が少ない）であることを示した。

以上のような本研究で試みた神社の類型化は、他の過疎地域の神社の実態把握にも有効であると考える。

(2) 得られた結果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の特色は、過疎地域の伝統宗教のうち、神社に焦点をあてることにある。近年までは過疎化と神社をテーマにした調査研究の事例が少ないまま、過疎問題と神社に関する対策が論じられてきたきらいがあった。その現状を踏まえると、本研究は典型的な過疎地域である高知県窪川町の事例を取り上げることで、日本国内の宗教状況が過疎化によってどのように変化していくのかが提示できるであろう。また、高岡神社の例祭に集まる氏子を含む地域住民を対象にした調査票調査と神社関係者を対象にしたデプスインタビュー調査といった量的･質的アプローチをともに用いることで、過疎地域における神社の機能の変化過程を、外部と内部の変化から把握できる。

過疎化と神社神道に関しては、伝統仏教とは異なり、海外においても体系的な研究は積極的になされていない。窪川町という限定された地域内のすべての神社に関する体系的な研究を試みた本研究は、県内外の他の地域との比較研究を通して、過疎地・限界集落化が及ぼした地域社会への文化的影響の全体像を理解できる可能性があると考える。また、人口流動や人口減少は日本だけの問題に留まらない。本研究は共通問題をかかえる諸外国における宗教との比較研究も可能になると考える。

(3) 今後の課題と展望

第一に、追跡調査を含め、継続的な実態調査の実施を進めたい。本研究の実施期間中においても、当該地域である旧窪川町では人口減少が進んでおり、非法人を含め 200 を優に超える神社の護持運営に対する氏子の不安は増している。それには、ほとんどの集落の神社において、護持運営の中核をなす氏子が高齢化していることが背景にあるだろう。さらにいえば、一部の人口減少が加速度的に進行する集落では、集落の存続が喫緊の課題となっているうえ、その影響で地域の神社も不活動化する可能性（「不活動神社」）が浮上している。そのような現象は、地域差があるとはいえ、全国の過疎地域においても同様のことが見られるのではないだろうか。

このような状況を踏まえて、今後も継続的に実態調査を進めることによって、人口減少が進む過疎地域とそこに暮らす氏子を含む地域住民の神社を中心にした信仰生活に関する理解が深まることは明らかである。

第二は、他地域の調査との比較研究の実施である。本研究による調査はあくまで過疎地域の一部の概況を把握するためのものであることから、その結果をもって日本全土における過疎地域神社の状況を網羅することはできない。風習・慣習、伝統行事などは地域によって異なり、それらと深く関係する神社と氏子の信仰生活にも、地域差が存在することは当然である。その意味で、他の地域を対象にした実態調査を進め、さらには比較研究を行うことで、過疎化・少子高齢化によって内部と外部に生じた複雑な変化過程が把握できる。

もちろん、これらの課題への取り組みについては、研究代表者個人による調査では時間がかかるため、同分野で活躍する研究者らとの共同調査なども視野に入れて進めたい。

＜参考文献＞

石井研士、「神社神道と限界集落化」『神道宗教』、第 237 号、2016、1－24
石井研士 1998『戦後の社会変動と神社神道』（大明堂）
森岡清美 1987『近代の集落神社と国家統制』（吉川弘文館）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

１．冬月律「過疎地神社の現況と氏子意識――高知県旧窪川町の神社と氏子の調査」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第 13 号、169－201、2019 年
２．冬月律「神道と過疎化に関する研究史―広義としての社会変動の枠組みから」『モラロジー研究』第 79 号、査読有、pp.29－50、2017 年

〔学会発表〕（計 6 件）

１．冬月律「現代社会と伝統宗教―地域社会で社寺に求められるものとは？」、青年住職・神職交流会（富山県神道青年会主催）、日枝神社、招待講演、2018 年 7 月 25 日
２．冬月律「過疎地神社の現状と課題―神社と氏子に関する意識調査から」、道徳科学研究センター現代倫理道徳科学研究会、モラロジー研究所、2018 年 1 月 10 日
３．冬月律「過疎地域の神社神道―神社と氏子に関する意識調査から」神道宗教学会第 71 回学術大会個人発表、査読無、國學院大學、2017 年 12 月 3 日
４．冬月律「人口減少社会日本における伝統宗教の現況と課題―高知県下の過疎地域を事例に」日本人口学会第 68 回大会個人発表、査読無、麗澤大学、2016 年 6 月 12 日
５．冬月律「日本の伝統宗教教団の過疎対策の現況と課題⑴―神社界の取り組みを中心に」道徳科学研究センター現代倫理道徳科学研究会、モラロジー研究所、2016 年 11 月 2 日
６．冬月律「過疎地域における神社の現況とその類型化の試み―高知県旧窪川町をモデルにして」第 70 回神道宗教学会学術大会個人発表、査読無、國學院大學、2016 年 12 月 4 日

〔その他〕

冬月律『過疎地域における神社神道の変容に関する宗教社会学的調査研究』（研究成果報告書）、麗澤大学、2019 年 3 月

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。